

広陵町埋蔵文化財調査概報 6

寺戸鳥掛遺跡発掘調査概報

1993

広陵町教育委員会

例　　言

1. 本書は奈良県北葛城郡広陵町大字寺戸17-1番地に所在する寺戸鳥掛遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は岸上石油株式会社の委託を受け広陵町教育委員会が実施した。
3. 調査期間は平成4年4月6日から5月7日まで、調査面積は約180m²である。
4. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体	広陵町教育委員会
調査指導	奈良県教育委員会文化財保存課
調査事務局	広陵町教育委員会社会教育課
調査担当者	広陵町教育委員会社会教育課嘱託 高橋浩樹
調査参加者	青木勝義、浅尾和宏、北橋昇、藤井清治、松井正一

5. 遺物整理ならびに概報作製にあたっては蒲生玲子、高井美智子、多田慶子、藤村孝子の諸氏の協力があった。
6. 調査に際しては土地所有者の梅本平氏、岸上石油株式会社、株式会社川西建工社ならびに地元の方々の多大なご理解とご協力を賜った。記して感謝いたします。
7. 本書の執筆及び編集は高橋が行った。

本文目次

I 調査の契機	1
II 調査の概要	2
1 調査の方法	2
2 層序	2
III 検出遺構	3
1 第1トレンチ	3
2 第2トレンチ	4
IV 出土遺物	5
円筒埴輪	5
形象埴輪	6
土器	7
V まとめ	10

挿図目次

図1 周辺遺跡分布図 (1 / 10,000)	1
図2 下層遺構平面図 (1 / 200)	2
図3 古墳周溝内埴輪出土状況図 (1 / 40)	4
図4 出土遺物実測図 (1 / 5)	8
図5 出土遺物実測図 (1 / 5)	9

図版目次

図版1	1 調査区全景 (南から)
	2 方形周溝状遺構 (西から)
図版2	1 第1トレンチ全景 (南から)
	2 第1トレンチ全景 (北から)
図版3	1 第2トレンチ全景 (南から)
	2 第2トレンチ全景 (北から)
図版4	1 古墳周溝内埴輪出土状況 (東から)
	2 古墳周溝内埴輪出土状況 (北から)

I. 調査の契機

奈良県北葛城郡広陵町大字寺戸に所在する寺戸鳥掛遺跡は奈良～平安時代の周知の遺跡である。今回の調査は岸上石油株式会社（代表取締役 岸上弘子）届け出の給油所建設に伴う事前発掘調査で、調査は2ヶ所にトレンチを設定して平成4年4月6日から5月7日まで行った。

調査地は奈良盆地の西部を南北にのびる馬見丘陵の東裾部に位置し、現状は水田であるが、今回の調査で尾根状地形を検出しており、遺跡は馬見丘陵の主幹丘陵より北東に派生する尾根上に位置しているものと思われる。この尾根上には飛鳥～奈良時代の寺院である寺戸廃寺と古墳時代後期のシドマ塚古墳が存在する。また、この尾根の北裾部で畿内第V様式の甕が出土しており、尾根上に弥生時代後期の遺跡の存在が推測される。



- | | | | |
|------------|----------|------------|------------|
| 1. 池上古墳 | 5. 乙女山古墳 | 9. 寺戸遺跡 | 13. 寺戸鳥掛遺跡 |
| 2. 大野赤坂遺跡 | 6. 下池遺跡 | 10. 文代山古墳 | 14. 南大豆川遺跡 |
| 3. 坊主山古墳 | 7. 倉塚北古墳 | 11. シドマ塚古墳 | 15. 寺戸東遺跡 |
| 4. 大野南池上遺跡 | 8. 寺戸廃寺 | 12. 今回調査地 | |

図 1 周辺遺跡分布図

II. 調査の概要

1. 調査の方法

調査はまず調査対象地の西側に水田の畦畔に平行する形で長さ17.5m、幅6mの南北に細長いトレンチを設定して造構の有無確認を行った。その結果、良好な遺物包含層と造構の存在を確認したので造構の検出状況にあわせて北側にトレンチを拡張するとともに東側にトレンチを設定して調査を実施した。このうち西側を第1トレンチ、東側を第2トレンチとする。調査面積は約180m²である。

2. 層序

今回の調査における基本的な層序は現地表面より水田耕作土(15cm)、床土(10cm)、淡灰茶色を呈する中世以降の堆積土(20cm)、茶褐色を呈する奈良時代末～平安時代前期の包含層(20cm)となっており、北側では現地表面下0.4～0.5m、南側では0.8～1mで地山に達する。地山は調査区の西側では黄褐色を呈する砂質土、東側では黄褐色を呈する粘土となっている。今回の調査では奈良～平安時代前期の包含層上面(上層)と地山上面(下層)において造構を検出した。

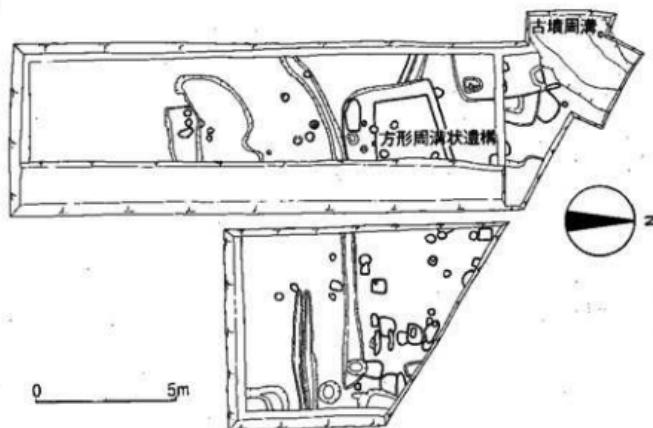


図2 下層造構平面図

III. 検出遺構

1. 第1トレンチ

第1トレンチは西側長21.5m、東側長18.5m、幅6mの南北に細長いトレンチで後にトレンチの北西隅で古墳の周溝の一部が検出され、その形状および規模を確認するためにその部分を北へ長さ1.5m、幅3m、西へ長さ1m、幅3m程拡張した。

遺構面は二層に分かれ、上層では茶褐色を呈する奈良時代末～平安時代前期の包含層をベースとして平安時代後期の東西、南北方向の素掘溝16条、溝3条、土坑1基とごく最近の南北方向の素掘溝5条の二時期の遺構を検出した。

下層では黄褐色砂質土をベースとして古墳1基、方形周溝状遺構1基、溝3条、土坑7基、ピット29基を検出した。

古 墳

古墳はトレンチの北西隅で検出されたが、墳丘はすでに削平されているうえに調査区の制約上ごく一部しか検出されていないために規模等は不明である。しかし、周溝が弧形に巡っており、推定すると直径15m程の円墳になると思われる。主体部は調査区外に位置するが中世以降の耕作によって削平されており残存していない可能性が高い。

周溝は幅1.9～2.7m、深さ0.2～0.6mをはかり、その埋土は二層に分かれ、上層は茶褐色を呈する中世以降の擾乱土であり下層の埴輪が若干混じっている。下層は暗灰褐色を呈する古墳時代後期の堆積層であり、その上面で埴輪が出土した。埴輪は円筒埴輪の他に朝顔形埴輪、蓋形埴輪、鶏形埴輪、動物埴輪、武人埴輪、盾持人埴輪が出土した。また、埴輪と共にTK209型式の須恵器高环の脚部が出土しているが、これは埴輪の年代を示すものではなく、埴輪が周溝に廃棄された年代を示すものであると思われる。というのは埴輪の出土状況をみてみると埴輪は高环と同一面で出土しているが、個体としてのまとまりが認められず片断が散在した状況で出土しており、また、接合、復元できるものも少なく、意図的に古墳から埴輪を引き抜き、打ち碎いて周溝に廃棄したのではないかと思われる。

この古墳の築造年代は周溝より出土した埴輪から5世紀後半であると思われる。

方形周溝状遺構

方形周溝状遺構はトレンチの中央やや北側で検出され、周溝部は西側長3.2m、南、北側長3m以上、幅0.3～1.2m、深さ0.1mをはかる。遺構の性格および時期については削平が著しいうえに出土遺物が皆無であるために詳細はわからないが、層序や切合関係から奈良時代末以前であると思われる。

2. 第2トレンチ

第2トレンチは第1トレンチの東へ幅0.5mのセクションベルトを残して設定した西側長10m、東側長5.5m、幅7mのトレンチである。

遺構面は二層に分かれ、上層では茶褐色を呈する奈良時代末～平安時代前期の包含層をベースとして平安時代後期の東西、南北方向の素掘溝10条、溝3条、土坑1基とごく最近の南北方向の素掘溝4条の二時期の遺構を検出した。

下層では西側では黄褐色砂質土、東側では黄褐色粘土をベースとして溝3条、土坑7基、ピット28基を検出した。

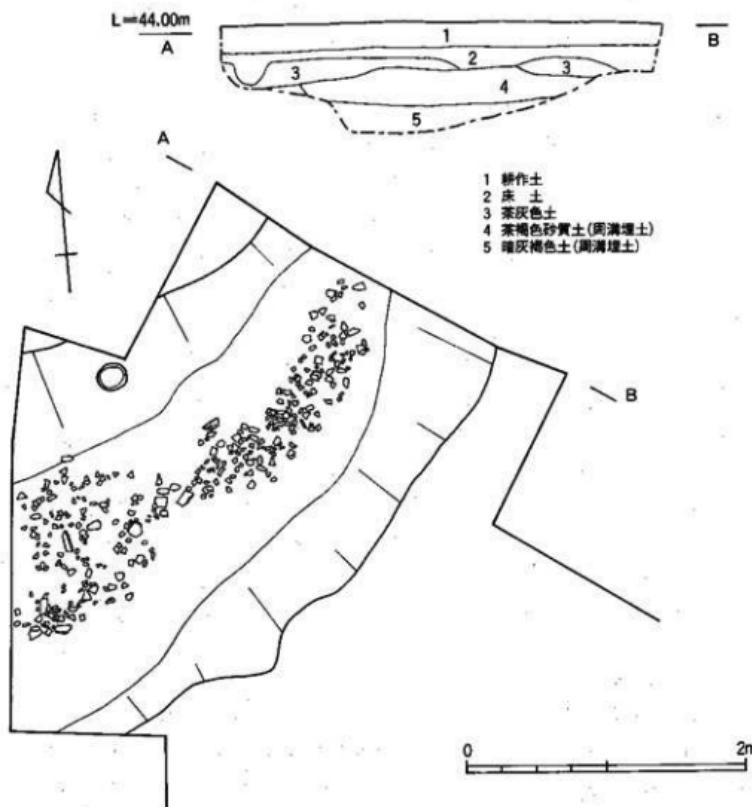


図3 古墳周溝内埴輪出土状況図

IV. 出土遺物

円筒埴輪（図4 1～4）

円筒埴輪は古墳の周溝よりコンテナ5箱分出土したが破片ばかりであり、全体の形態がうかがえるものではなく、底部から第1段突帯にかけて復元できるものが4基あるのみである。円筒埴輪はほとんどが川西編年第V期のものであるが、第2段にヨコハケ調整のみられるものが数点あることから第V期でも最古段階に位置づけることができる。なお、円筒埴輪には土師質のものと須恵質のものがある。

1は底径12.6cm、現存高14.6cmをはかる。突帯は断面台形を呈しており、断続ナデ技法は認められない。透孔は第一段突帯の上に突帯に接するように穿たれている。調整は外面はタテハケ、内面は縦方向のナデが施され、底部外面はタテハケを施した後に指1本分のヨコナデ調整が行われている。

2は底径15.6cm、現存高15.0cmをはかる。突帯は突出度が小さく、突帯凸面には2条の沈線が施されている。断続ナデ技法は認められない。透孔は第一段突帯の上に突帯に接するように穿たれている。調整は外面はタテハケ、内面は縦方向のナデが施されているが、底部調整は行われていない。また、底部端面には粗い板目の痕跡がみられ、埴輪を板の上にのせて製作したものと思われる。

3は底径15.4cm、現存高16.9cmをはかる。透孔は他の埴輪とは同じ位置に穿たれているが、透孔の下には突帯がなく、突帯が剥離した痕跡や突帯貼り付け前に行われる刺突、沈線等も認められず、当初より突帯は貼り付けられていなかった可能性が強い。調整は外面はタテハケ、内面は縦方向のナデが施されているが、底部調整は行われていない。

4は底径15.4cm、現存高11.3cmをはかる。突帯は断面台形を呈しており、断続ナデ技法は認められない。透孔は第一段突帯の上に突帯に接するように穿たれている。調整は外面はタテハケ、内面は縦方向のナデが施され、底部内面は底部調整として横方向にケズリ調整が行われている。

朝顔形埴輪（図4 5）

5は朝顔形埴輪の肩から口縁にかけての部分である。口径36.6cm、現存高20.6cmをはかる。口縁は直線的に外反した後に端部近くで大きく屈曲し、端部は四角形を呈する。突帯は頸部では断面三角形を呈するが、口縁部と円筒部では断面台形を呈する。調整は口縁部外面はタテハケ、内面は端部付近と頸部がヨコハケであるが、その間は左上りのナナメハケが施されている。また、端部はヨコハケの後にヨコナデ調整が行われている。円筒部外面はタテハケ、内面はナデ調整が施されている。

形象埴輪（図4、5 6～16）

形象埴輪は蓋形、武人、盾持人、鶏、動物埴輪がある。

蓋形埴輪（6）

6は蓋形埴輪の立ち飾り部で、U字板の内側に1個、外側に2個の鱗がつくが、U字板と鱗はひとつに融合する傾向があり、U字板の外縁に切り込み、くり込みを入れてU字板本体と鱗をつくりだしている。また、鱗は誇張されU字板よりも高く表現されている。U字板本体と鱗は2条の線刻界線によって区別されるが一部形骸化しており、線刻界線内は2条の沈線によって2分割されている。

武人埴輪（7～9）

7は高さ19.2cmをはかり、背は線刻によって伏板、脣巻板、腰巻板、三角形の地板を表現した衝角付背であるが鉢および革縫の表現はされていない。縫に相当する部分には地板第二段と腰巻板が表現されており縫としての意識が欠如しているものと思われる。このことは衝角底板と縫の縁に沿って2条の沈線が連続して巡っていることからもうかがえる。さらに、この2条の沈線が伏板を切っており、背本来の姿は形骸化している。衝角底板は波形を呈し、顔面とは段をなす。武人埴輪の衝角底板は水平であるのが普遍的であり、このような波形を呈するものは朝鮮半島の実物の蒙古鉢形背にみられるのみである。しかし、蒙古鉢形背は円頭状の形態をなし、地板は堅版板を用いていることからその系譜は異なるものと思われる。地板第一段には三角形の地板が17枚あり、後頭部へいくほど地板は小さくなっている。また、地板第二段には三角形の地板が11枚あり、地板第一段とは異なって地板はすべてほぼ同じ大きさである。顔面は背を目深にかぶっているために額はかくれているが、ヘラ状工具で切り取られたややつり上がった目をもち、口もヘラ状工具で切り取って表現されている。鼻は団子鼻で、鼻から左頬にかけて翼状の入墨がみられるが、このような左右非対称な入墨は珍しい。

8は高さ18.8cmをはかり、背は7と同様の衝角付背である。衝角底板は波形を呈し、衝角底板と縫の縁に沿って2条の沈線が巡るが、伏板によって切られている。また、地板第一段には7と同じ17枚の地板があるが、地板第二段は15枚と多くなっており、地板の大きさも7の地板第一段とは異なり地板第一、二段とも各々ほぼ同じ大きさとなっている。腰巻板は後頭部が欠損しているがその下端が後頭部にいくほど下方に広がり、幅広となっているものと思われる。顔面も7と同じく目と口をヘラ状工具で切り取って表現し、鼻から左頬にかけて欠損しているが、ここにも左右非対称の翼状の入墨があったものと思われる。

9は武人埴輪の顔面である。顔面は7・8と同じく目と口をヘラ状工具で切り取って表現し、鼻から左頬にかけて左右非対称の翼状の入墨がある。

盾持人埴輪(10~12)

10は円筒状の軸部の両側面に軸部にはば直交するように鋒がつき、盾中央部は円筒のむくらみを保っているが、上方は頭部をのせるため少しそぼまっている。盾は上辺幅29.4cm、下辺幅25.6cmで上辺がやや幅広になっており、下辺部裏側の軸部と盾の接合部には粘土塊が貼付けられている。盾の文様は摩滅のため残存していないが、盾をやや前傾させて右手で盾の縁をつかんでいる。右手の付け根の下の軸部側面には円形の透孔が穿たれているが、これに相対する軸部左側面は盾と軸部の接合部となっており透孔はみられない。

11は盾持人埴輪の盾の右側縁辺部で、盾前面にはヨコハケ、左上がりのナナメハケが施されており、文様は認められない。また、下辺部裏側の軸部と盾の接合部には粘土塊が貼付けられている。

12は盾持人埴輪の盾の右側縁辺部で、縦方向に文様と思われる2本の平行沈線がある。

以上、盾持人埴輪の盾には文様を持つもの(12)と持たないもの(11)がある。

鶏形埴輪(13~15)

13は嘴のつけ根から頭部にかけて鋸歯状の大きな鶏冠をもち、円形の線刻を中央に付した円形付文で耳を、円形の線刻で目を表現している。嘴は鋭く突出し、線刻によって上下を区別しており、上嘴の付け根近くには鼻がある。嘴の下には肉垂がつき、嘴とは線刻によって区別されている。

14は嘴の付け根から頭部にかけて小さな鋸歯状の鶏冠をもち、目と耳の表現は13と同じである。嘴は鈍く、あまり突出しておらず、上下の区別はされていない。上嘴の付け根近くには鼻がある。嘴の下には肉垂がつき、嘴とは線刻によって区別されている。

15は底径14.1cm、現存高18.5cmをはかる鶏形埴輪の円筒部であると思われる。突帯は大きく突出し、断面台形を呈し、突帯の下には楕円形の透孔が穿たれている。調整は外面はタテハケ、内面はナデ調整が施されている。

動物埴輪(16)

16は動物埴輪の脚部であるが何の動物であるか特定はできない。内部は中空になっており、底部には穿孔が行われている。

土器(図5 17)

17は須恵器高环の脚部である。脚は基部から外反した後、端部で屈曲して段をなしている。脚端部は上下につまみ上げ、鋭く、丸くおさまる。脚部には長方形の二段透しが三方向に穿たれており、上下の透孔の間には2条の沈線がある。また、脚部と裾部の境にも1条の沈線が見られる。調整は内面の上段透し下端より上にしばり目が見られる他は内外面ともすべてヨコナデ調整が施されている。

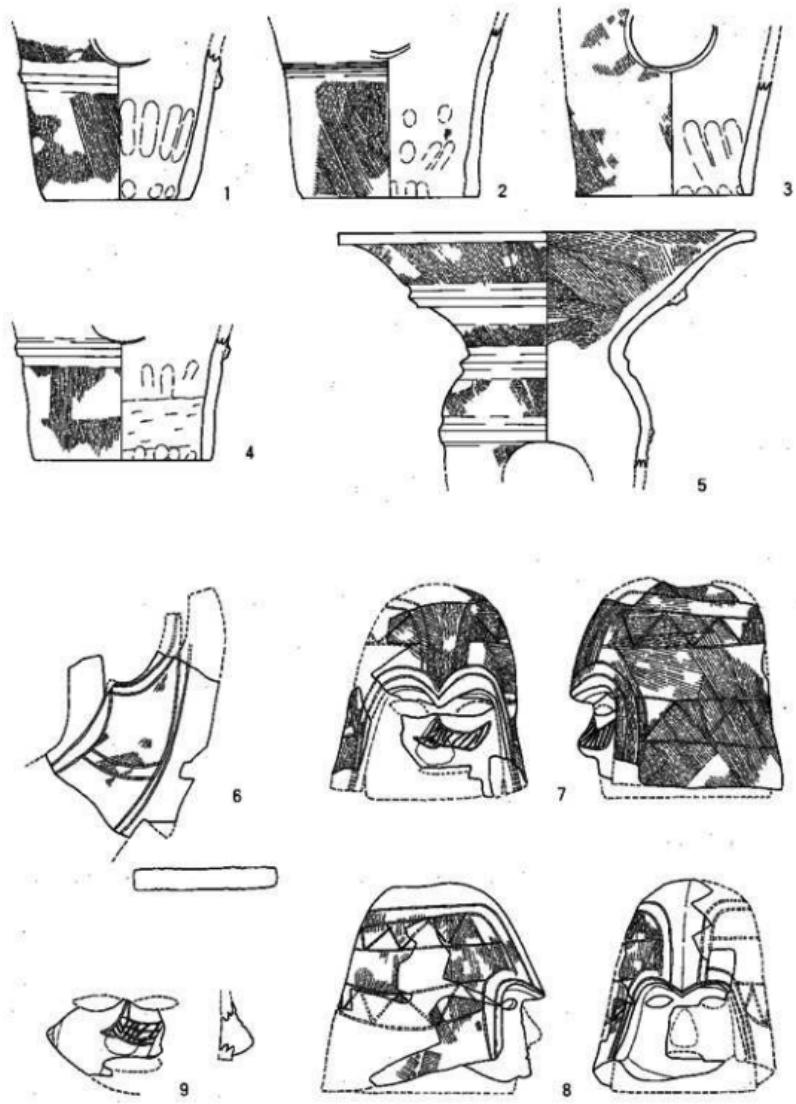


图 4 出土遗物实测图

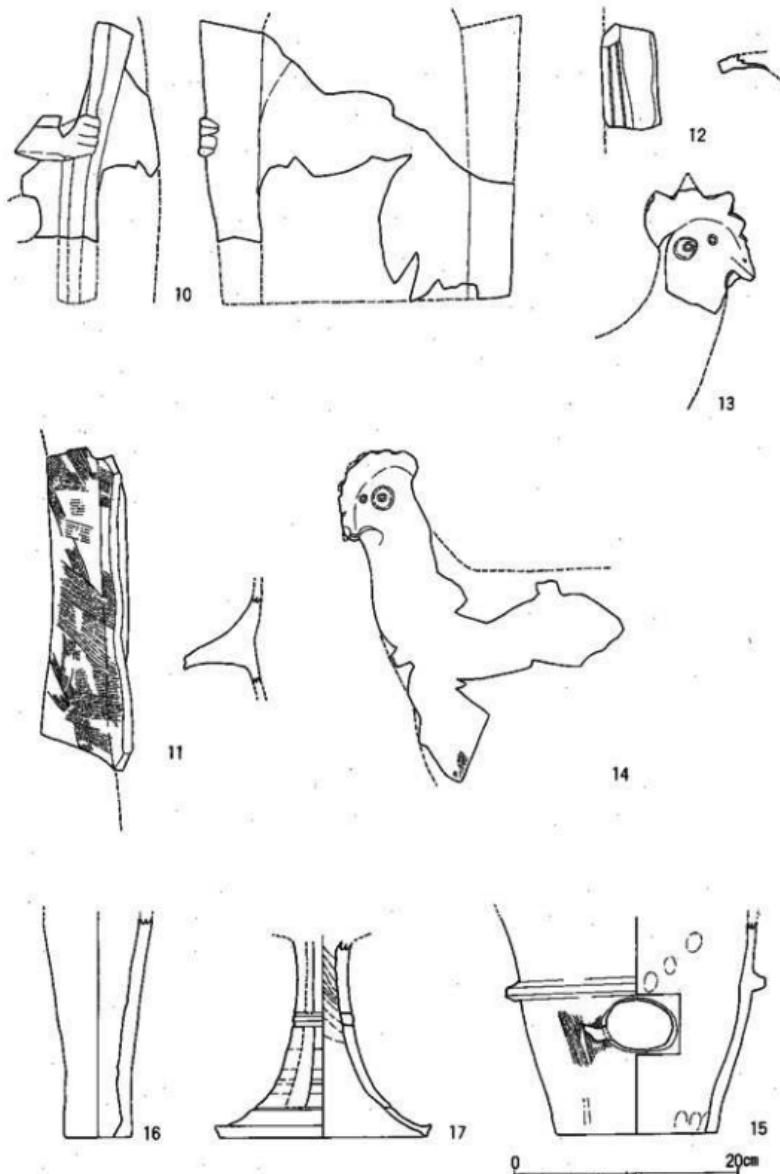


図 5 出土遺物実測図

V. まとめ

今回検出した古墳は墳丘規模、主体部は不明であるが復元すると直径15m程の円墳になると思われる。この古墳は周溝内から出土した埴輪より5世紀後半に位置づけることができ、馬見古墳群において巨大古墳の築造が終焉をむかえる古墳時代中期から後期への移行期の造墓構造を解明する重要な資料である。

馬見古墳群は4世紀後半に新山古墳が築造され、馬見古墳群での古墳の築造が開始される。その後、古墳時代中期になると巣山古墳をはじめとする前方後円墳や帆立貝式古墳等様々な種類の古墳が築造され、盛行期をむかえる。しかし、やがて中期後半になると巨大古墳の築造が停止し、6世紀前半には古墳はほとんど築造されなくなる。巨大古墳の消滅後わずかの断絶期を経て6世紀後半になると直径10~20mの円墳を中心とした群集墳が形成されるようになり、7世紀前半まで古墳は築造される。このような中で当遺跡の古墳は巨大古墳の終焉期と古墳築造の断絶期の過渡期に位置づけられるものであり、また、馬見古墳群の古墳に埴輪が樹立されなくなる過渡期でもあり馬見古墳群の変遷を考えるうえで興味深いものである。また、形象埴輪の組成についても器財埴輪中心から人物、動物埴輪中心となっており、古墳祭祀のあり方についても注目される。つまり、巨大古墳の終焉とともに古墳祭祀のあり方も変化したものであり、ここに馬見古墳群における古墳時代中期と後期の過渡期を見出すことができるのではないだろうか。

また、今回検出した古墳のようにこの古墳が立地する尾根上に中世以降の耕作によって削平された古墳の存在が推測される。

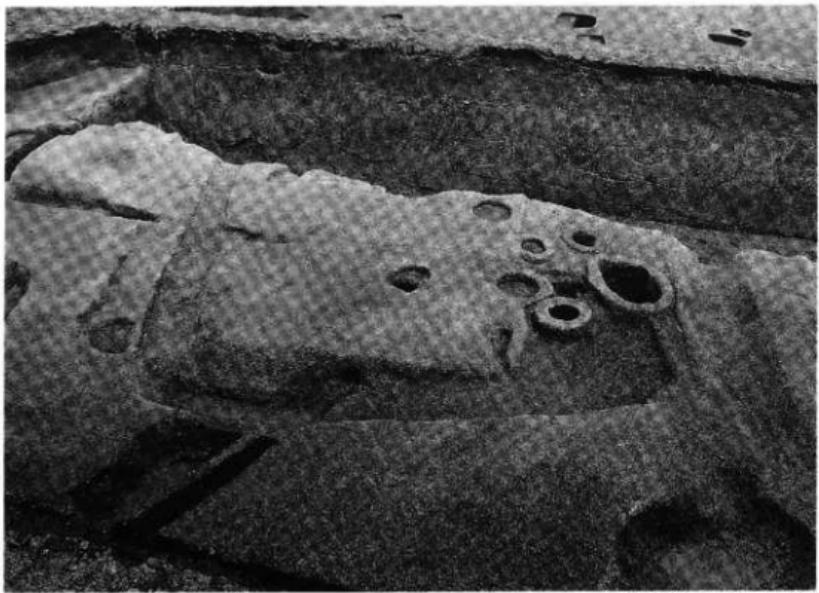
古墳の周溝より出土した円筒埴輪はほとんどが川西編年第V期のものであるが、外面の2次調整にヨコハケを用いるものもあることより第V期の最古段階に位置づけられるものと思われる。また、底径は12.6~15.6cm、底部から第1段突帯までの長さは10cm前後であり、当古墳の埴輪は形態差は多少認められるが、ほぼ同規格でつくられたものであると思われる。一方、形象埴輪はその組成をみてみると人物、動物埴輪が主であり、従来の器財埴輪中心から人物、動物埴輪中心へとなっており、古墳祭祀の変化がうかがえる。盾持人埴輪は3個体以上出土しており、さらに背面に文様を持つものと持たないもののが存在し、その使い分けが考えられ古墳祭祀を考えるうえでは非常に興味深い。また、盾持人埴輪は盾をもつ右手が表現されており、このように盾持人埴輪の手を表現したものには福島県原山1号墳で確認されているのみであり非常に珍しい。武人埴輪は5個体以上出土しており、関東を除いては1つの古墳からこれほど多くの武人埴輪が出土しているのは例がないが、畿内でも甲冑を着用しない物を背負っただけの軽装の半身像の武人埴輪が複数出土した古墳が数例確認されている。しかし、これらが軽装の半身像であるのに対して当古墳出土の武人埴輪はすべて背を着用しており、前者とは明らかに身分差を感じられ、被葬者の武人的性格を強く反映している。やや時期が下るが6世紀には関東では韁、鞚、太刀等、被葬者の武人的性格を反映する武器、武具形埴輪が中心に立て並べられている。これに対して畿内では蓋、石見形盾等の威儀具や象徴的な器

物をかたどった器財埴輪が中心となっている。当古墳は蓋形埴輪が出土しているが武人埴輪が多く出土しており、被葬者の武人的性格が強く、畿内においては特異な性格を有しており古墳祭祀のあり方が注目される。武人埴輪はすべて頭部だけであり、体部、手足の破片は確認しておらず大阪府長原45号墳、京都府赤坂古墳出土の武人埴輪のような手足を欠く武人埴輪である可能性が強い。長原45号墳からはTK 73型式の須恵器がまとめて出土し、共伴した円筒埴輪は外面の2次調整にB種ヨコハケを用いた川西編年第Ⅳ期のもので5世紀中頃に比定できる。当古墳の武人埴輪は土器が共伴していないので詳細な時期は不明であるが、円筒埴輪は川西編年第Ⅴ期の最古段階に位置づけられるもので長原45号墳に近い年代が与えられ、また、巫女等の人物埴輪が伴っていないことより当古墳の武人埴輪は人物埴輪の出現期に位置づけることができ、長原45号墳よりやや後出するが甲冑形埴輪から武人埴輪への発展途にある過渡的な武人埴輪であると考えられる。また、ここで武人埴輪が甲冑形埴輪から発展したものと考えると馬見古墳群では佐味田宝塚古墳、乙女山古墳、坊塚古墳、石塚古墳から甲冑形埴輪が出土し、奈良県内でもその分布が多いところであり、当古墳の被葬者の氏族が前代より代々武人的性格を有していた可能性が考えられる。また、初期の人物埴輪に甲冑形埴輪が伴うということを考慮に入れると甲冑形埴輪の分布が注目されるとともに武人埴輪との関係及び甲冑形埴輪から武人埴輪への発展過程を考えるうえで興味深いものであり、当古墳の武人埴輪は人物埴輪の出現に関わる重要な資料である。

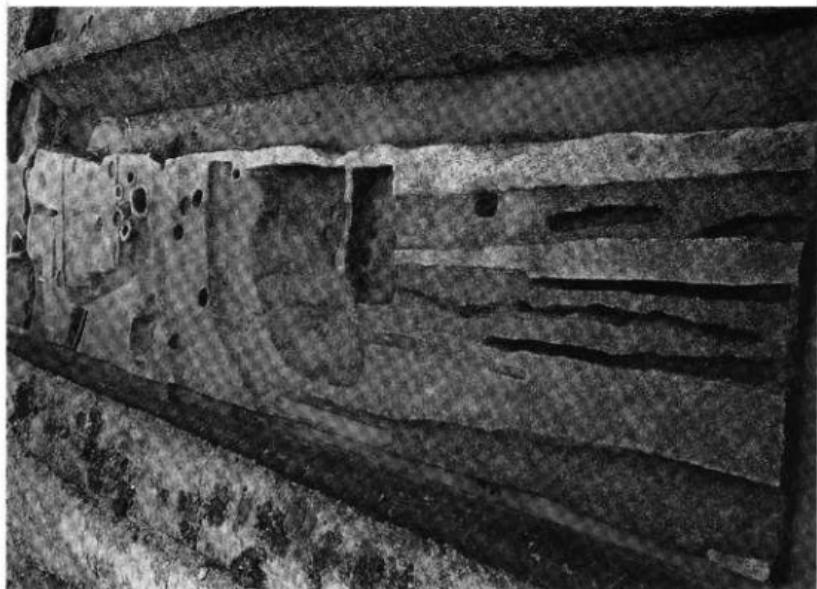
図 版



調査区全景（南から）



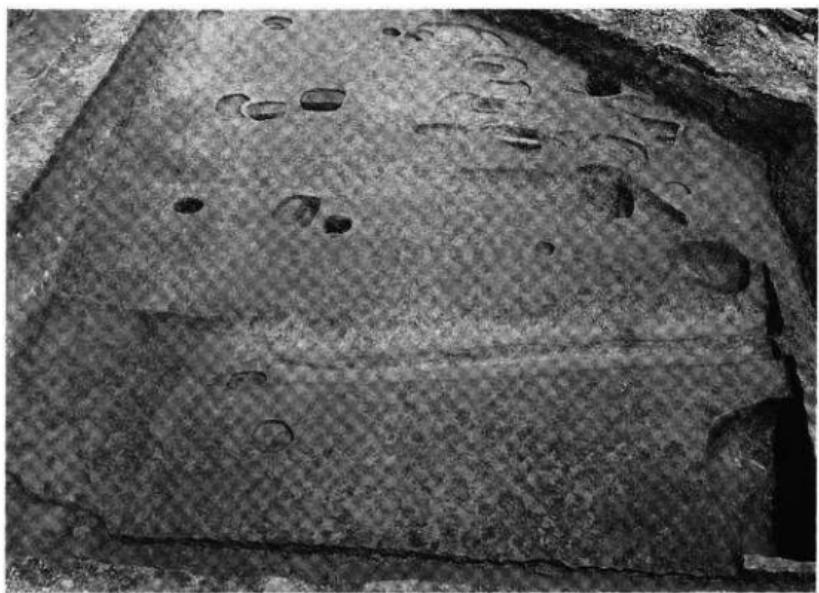
方形周溝状造構（西から）



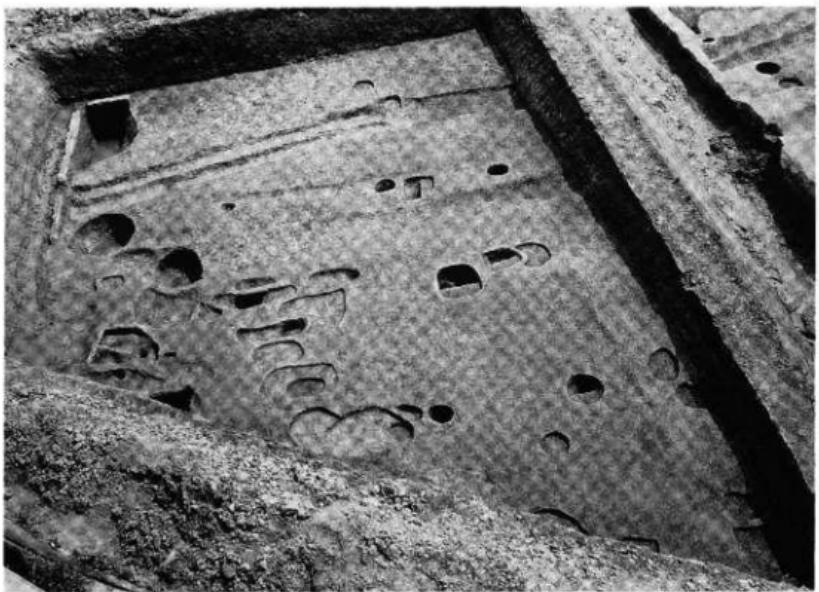
第一メッシュ全層（雨ぬれ）



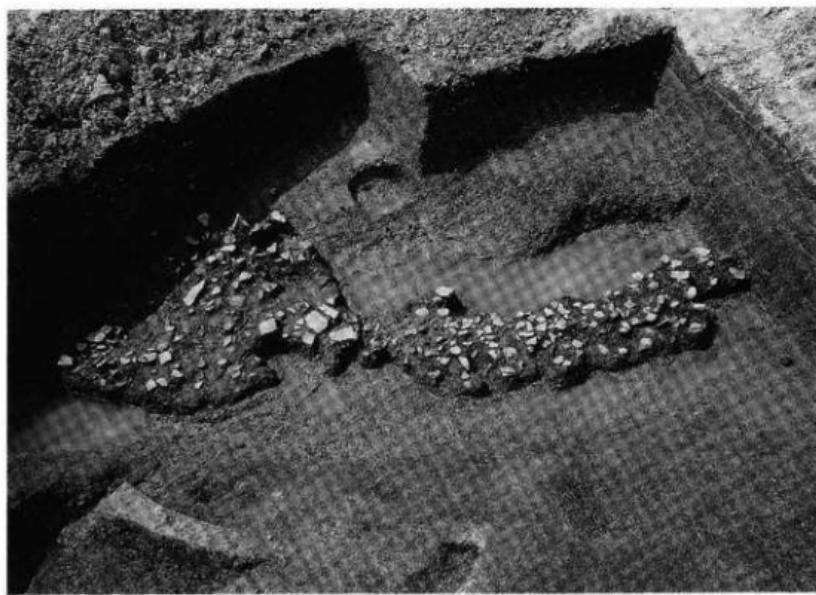
第一メッシュ全層（乾燥）



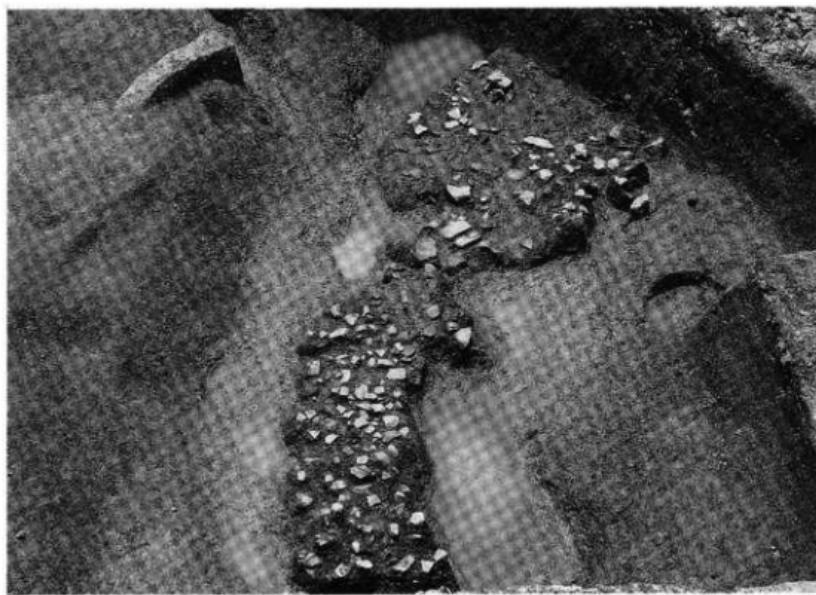
第2トレンチ全景（南から）



第2トレンチ全景（北から）



古墳周溝内埴輪出土状況（東から）



古墳周溝内埴輪出土状況（北から）

広陵町埋蔵文化財調査概報 6
寺戸鳥掛遺跡発掘調査概報

平成5年3月31日
発行 広陵町教育委員会
印刷 橋本印刷株式会社